英語教育論

英語教育論

福原麟太郎著作集

9

研究社

1969

福原麟太郎著作集 9
英語教育論
昭和四十四年七月二十日
昭和四十四年七月二十五日
定価 一、三
著作者 福原麟太郎
発行者 小酒井益蔵
印刷者 小酒井益三郎
印刷所 研究社印刷株式会社
発行所 研究社出版株式会社
郵便番号一六二
東京都新宿区神楽坂一の二
電話東京(二六九)四五二一(代表)
振替東京 八三七六一
(乱丁・落丁本はお取替え致します)

© R. Fukuhara

目次

英語教育論

英学復興……三
英語教育論……一三
四つの注文……二九
英語教育の生活化……三三
英語教育と英文学……四九
ベイシックについて……六九
学校における英語英文学……七四
前篇——主として英語……七四
後篇——主として英文学……九二
岡倉由三郎氏と英語教育……一〇四

一　小　伝……一〇四
二　「外国語教授新論」……一〇七
三　『外国語最新教授法』……一一〇
四　『英語教育』……一一三
五　その後……一一四

教師のことば

英語の世界……一二一
新制大学と英語……一三〇
英語教授法以前の問題……一三七
学校劇としてのシェイクスピア……一四二
日本の英語教育……一四九
再び英語教育について……一五三
教科書検定の問題……一五七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

日本の英語——学校英語について……一六〇
英語教育の研究……一六七
鈍重の弁……一六九
英語の稽古……一七二
日本人の英会話……一七四
或る英文学教室の沿革……一七六
英語教育に望むこと……一九〇
外国語教育論によせて……一九二
『英語教育事典』序文……一九七

ことばの教育

ことばの教育……二〇五
一　英　語……二〇五
二　ローマ字と思想……二〇七

三　まず国語の整理から……二二一
文体の問題……二二四
太初にことばあり……二二九
太初にことばあり……二二九
ことばの問題……二三三
役に立つ英語……二三六
日本人と外国語……二三〇
語学力について……二三五
誤訳の問題など……二三九
「オリムピック英語」に思う……二四三
後進国よ、さらば……二四五
文化交流と交流の自然……二五〇
ナショナル・リーダー……二五七
ナショナル・リーダー……二五七
ナショナル第二読本……二六三

英文法を学んだ頃……二六九

英　学

日本の英学（歴史）……二七七
日本の英学（思出）……三二一

英学時評　三三五

あとがき……五六九

掲載紙誌一覧表……五八一

著者近影　対本扉
大正七年高師附属中学嘱託の頃　対一八二
昭和九年竹村覚氏岡倉賞受賞記念　対一八三

英語教育論

英学復興

戦争が終ってから私どもに最も度々言いかけられた言葉は、これからあなた方は宜しいですね、という挨拶であった。いつも苦々しい思いをしてこれを聞いた。国亡びて何のわが職業ぞと思った。こんな時に役に立とうと思って英語を勉強していたわけではありません、とも答えた。去年の暮、私は二年ぶりに帰国した。そして親戚故旧と戦後初めて顔を合わせたのであったが、その時最も驚いたのは、戦争中私ども英語の教師は非常にあわれな生活をしていたと思われていたらしい事であった。圧迫され、いじめられ、除けものにされていたと人々は想像していたらしい。否むしろ、その人達がそのようにわれわれを見ていたのかも知れなかった。私どもは、すくなくとも大学の英文学教室はちっとも虐待などされなかったと答えて、私はその人々を反対に驚かせることが出来た。私どもは事実ちっとも研究に不便を感じなかった。外国からの図書の輸入が絶え、新聞雑誌が来ず、英米人が手近なところにいなかったための不便は当然であったが、言論思考はこちらから遠慮する以外特別の圧迫を受けなかった。学生は工場へ行って働いていた。私どももそれの監督に

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

出たりした。しかし工場で私どもは一週に一度、自分の学生を集めて講義をした。文学好きな陸軍の将校がかしこまって聴きに来たりした。大学の研究室には、毎日人々が集まって勉強していた。毎週輪講が催おされた。私どもの大学が戦火にかかって焼けたのは去年の五月二十五日であったが、英文学研究室のある建物は残ったので、その週もその次の週も輪講は欠かなかった。戦争が激しくなると、こっちも頑張って一回も休まなかった。警報が出ていてもやった。終戦の詔勅があった週にも続けた。要するに平気で英語を勉強しておりましたよという話をしたら、非常に不思議がられた。これからさきも私どもは、平然として勉強を続けてゆく。

この頃のようにアメリカとアメリカ語とが国内に氾濫するに至れば、われわれはなおさら厳格に自分達の学問を守ってゆかなければならない。正しいものは何であるか、正しい学問の仕方は何であるかを堅持しなければならない。学校の英語はその標準を示すものでなければならない。英語で金をもうけようという人々は何も英語教師にならなくてもよろしい。でたらめの米語の片言でも喋舌れば、それで易々としてなにがしかになるのである。デモクラシーが何であるかを知らなくてもよい。われわれは自由を欲すと叫んでいれば新時代人の顔をすることが出来る。しかしそれでは日本は救われない。よりよき日本を再建するためには、正しいものの標準を見失ってはならない。

外国語教授というのは、わが国ではまず英語教授であるが、それは単なる教授であってはならな

い。それは教育であるはずのものである。そしてそれは単に英語または米語を教えることではない。わが国に、英米を眺め英米を取り入れる窓を開いていることであるべきである。それは、正しい英米を取り入れるために開けられた窓である。正しい英語教育を行なうことが出来て初めて、われわれは正しいものを学ぶことが出来る。学校の英語はその役目をもっている。教育である。標準である。ただぺらぺら英語を喋舌ることではない。

外国語を学ぶことは二つの道において国民を刺戟し利益を与える。一つは、言語に対する意識を鋭くし、従って国語に対する自覚を生むことである。もう一つは、その外国語を通じてその国の文化に対する理解を与え、従って自国文化に反省をうながすことである。第一は言葉を言葉として学ぶことから直接に生ずる効果である。私は言葉の学修の形式的訓練を重んずる。それは無意味なことのようであるが、その無意味なことそのものが、重要な意味を持っているのである。第二はその言葉そのものを通じて、または言葉によって綴られた文章を通じて、その文化の姿を修得することである。それは何もその言葉を通じなくても翻訳でも解説でもよかろうという事が考えられる。しかしやはりその言葉を通じないと駄目である。ヂャズという言葉を知らなければヂャズの本体はつかめない。OKというのとオール・ライトというのは確かに違う。

私は、英語の形式的訓練についてはほとんど何も言うことがない。それは多くの経験家と学者が

十分に知っている問題である。私は主として英語の文化的な教育法について説をなすものである。そして今日までのところこの方面の仕事があまりに進んでいない。私は十年一日のごとく、いや二十五年一日のごとくその説をなして今日に至った。英語教育は文化的教養でありたいという事を何度も何度も口にし筆に書いた。私は世間の英語の先生達から恨まれ軽蔑された。しかしなおも私はその事を言いたい。私は何もそればかりが英語教育の問題ではないことを知っている。私自身は形式的訓練を重んじ、形式的訓練の十分でない人をあまり良い学者だとも教育家だとも考えない。形式的訓練を与えるだけの素養がないくせに内容的な知識を大切そうに振り廻す人を憐れみかつ排斥する。それにもかかわらず、どうか文化的教養を与える英語教育をして下さいとたのむ。

外国語は国と国との間の交渉がある時に存在するものである。それは一応通訳通信交際の便宜のものである。しかし国と国との交渉が始まると、同時に文化の交流ということが起らないでいない。そしてそれが国の運命にかかわって来る。殊に日本のような島国は、絶えず他国文化との交流がなければ、進歩発達は望まれない。外国語学者は、そういう文化交流を正しく導いてゆく人にならなくてはならない。わが国では蘭語学者を蘭学者といい、英語の学者を英学者といった。その「英学」というのは英米の学問の義であった。英語を通じて直接英米の経済学を知っており、その歴史を学んでおり、英米の文化一班を伝えうる人の義であった。あらゆる外国語学者は、外国文化

学者でなくてはならない。わが国の英語教師は、もう一ぺん英学者に帰り、英学復興をしなければならない。そして英米文化との交流に関与して、日本のために良きように働かなければならない。もし、その種類の仕事がなくて、ただ通信談話の仲立ちでしかないならば、またそのような目的でのみ学校で英語を教えるのならば、男子一人の仕事としてあまりに軽過ぎる。英語教師は英米を眺める日本の目であり窓でなくてはならない。英語教育を通じて学生はその目を養い、窓を開く人になってくれるのでなければ意味が無さすぎる。

英米文化の良きものを輸入し、これをわが国の文化に加える。そういう役目が第一にある。教室においてはそのような知識を学生に与えて、教養の広い同情の深い人に仕立てる。それは英語を教えることによって、たしかに出来ることなのである。その上、英米文化の悪しきものを却ける、それがまた英語教師の役目である。綿を輸入すれば綿といっしょに害虫が輸入される。それと同じである。良いものばかりは来ない。日本のために悪いものを見分けてこれを防止するのは重要な仕事である。また、英米文化の本質的なものと枝葉的なものを分別することも必要である。われわれは過去において、ヂャズと映画とボクシングとがアメリカであると思っていた。アメリカの本当のものを見出して正しいアメリカとは何であるかを人々に教えることをしなかった。またはその力が無かった。それを恥じている上にこの頃はまたひどいアメリカの氾濫である。言葉自身が恐ろしい俗

語卑語訛言の形で入って来る、アメリカ風俗が会釈なく日本を風靡する。この中にあって、正しいものは何であるか、正しい生活の仕方はどうであるかを判断してゆかなければ日本は大混乱に陥ってしまう。誰かが、採択の標準を示して、文化の移入の指導をしなければならない。それが英語教師の役である。英語教師はまず正しい英語を教えて、それを通じて得られる正しい文化の解釈を与えてゆく。それが標準になって、正しい文化の移入が行なわれる。文化移入と英語教師との関係はそれである。

英語を学んだ学生は、ただ英語が喋舌れ、読め、書け、するばかりでなく、英米文化に対して知識と意見とを持った人になるであろう。そして外国を知っているゆえに日本および国語を反省する力を持った人になるであろう。それはすなわち振幅の広い心を持った人である。もし日本の外国語教育が、それを目的として行なわれて来ていたならば、日本人はもっと教養の深い理解のすぐれた国民になっていたであろう。そしておそらく戦争の中に飛び込まないですんでいたであろう。その点私どもも強い責任を感じる。第四読本の訳が出来さえすれば百円の月給が貰える国は珍しいと、悪口を言われていた事態の結果がここに現われたのである。教員検定機構も教員養成学校も、この点を考え直さなければならない。

そのためには教師が勉強しなければならない。自分の教養に励まなければならない。人を教える

まえに自分を教えなければならない。そして、精一杯、心をこめて自分を磨かなければならない。学生は大ていの事は教えられても忘れてしまう。英語のごときも、何年か使わないでおれば、きれいに失くなってしまうであろう。しかし、その英語といっしょに教えられた外国文化の性質に対する無形の理解、それと共に養われた広い心構えは身について失くならないものであろう。それらを身につかせるためには、教師がただ知識として技術的に教えていたのでは駄目である。教師自身がそういう事に興味を持って自分でも勉強しており、人に教えるばかりでなく自分をも教えている人でなくてはならない。実際のところそういう人が教えれば、ただ英語を教えているばかりで、別に文化的註釈をしていなくても、自然何かしらそういう事を教えているものである。それは実に不思議なものである。昔東京高等師範学校に、言語学の教授が留守であったことがあって、今のK博士が、まだお若い頃、一、二年講義に来られた事があった。K博士はアイヌ語の専門家で言語概論を教えるのは初めてであると言っておられた。ところがその講義には非常な魅力があって、学生はこれにひきつけられ、そのクラスからは後に言語学を専攻する人が幾人も現われた。これは実に不思議な現象であった。K博士の講義は普通の概論であったのだから、それほど深くは行かなかったであろうし、失礼ながら博士自身そんなに上手にやられたろうとも思えない。おそらく、博士のアイヌ語に対する愛が博士の講義を生かしたのである。言葉に対する愛が学問の面白さとなって学生に

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com